

歴史から見る消防団の変遷



江戸の町火消の心意気を今に伝える「はしご乗り」

日本の家屋のほとんどは、木造であり、古くから火災とは切っても切れない縁でつながってきたといっても過言ではありません。都市が繁栄した江戸時代には大名火消や定火消、町火消といった火消組織が生まれます。その後、町火消は消防組と改組され、この頃、野田にも公設消防組が置かれました。昭和の時代には消防組が警防団に、戦後には現在の消防団へと改組され、現在まで地域を守る組織としてその活動が受け継がれてきました。

○ 消防組から警防団、消防団へ

戦国時代の戦乱が治まり、徳川幕府の時代に入ると、都市の繁栄に伴い、「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるほど火事も頻繁に発生しました。江戸時代の火消組織は、大名火消や定火消といった武家火消と町火消に大別され、定火消は公設消防、町火消は義勇消防の元祖と言われます。

明治維新に伴い、大名火消や定火消は廃止になりましたが、町火消は東京府に移管され、明治5年「消防組」に改組されました。

その後、明治27年勅令で「消防組規則」を制定し、消防組は知事の警察権に入り、費用は市町村の負担とされました。

千葉県内では、41の公設消防組が発足し、野田市域では、この時に野田町と関宿町に公設消防組が置かれました。明治後期から大正半ばにかけて、周囲の村にも公設消防組が組織されていきました。

大正12年、野田町消防組は7部制となり、大正15年に定められた「野田町消防組規定」では、各部それぞれに町内の担当区域が定められたほか、他地区や町外にも出動すること